『ファナティック』

１９９２

安穏とした時は一瞬たりとも訪れなかった。明晰な意識を苛立たしく思った。これが悪夢ならばどれだけ幸福なことだろうかと彼は何度も思った。

新居は魚河岸の奥にあった。部屋には生臭い風が絶えることなく吹き込んでくる。夏のことでエアコンは標準装備されているものの電気代を節約するために窓は開いたままにしてある。カーテンはなく直接顔に当たる光が眩しい。部屋の中には梱包されたままの書籍が置かれていた。それから留守番機能の付いた真新しい電話機が部屋の中央にあった。ほとんどの家財道具は捨ててきた。部屋はひと月ほど前に建てられたばかりの新築だった。それでも周囲の環境がよろしくないために意外に安価だった。娼婦の蝟集する色街の真ん中に位置していたからだ。真新しい木目の輝くフローリングが心地よい。だが、失業中の彼には不安の音楽を奏でる小道具にしか思えなかった。何度も挑戦した新しい小説の束が吹く風にぺらぺらとめくりあがり部屋中に散らばった。今は、書こうという気力もなく白川が某雑誌に依頼されて原稿を書くのに追われているさまを見ても羨ましくも思わなかった。留守番電話にはもう限界までメッセージが溜まっていた。知人や家族からのものはほとんどなかった。そこにあるのは借金の催促だけであった。クレジットやローン、消費者金融などありとあらゆる催促。郷里の図書館からの本の返却について。以前の勤務先から厚生年金手帳の返還について。市民税の督促。それは数年分にも及んでいる。彼は新居の電話番号を眞子と白川にしか教えなかったのにどこから情報が漏れたのか不思議でならなかった。眞子が裏切ったのかもしれないが。そういうわけで掛かってくる電話には一切出ないことにしていた。家賃さえまもなく取り立てがやってくるだろう。

少し前までは引越のアルバイトもしていた。徹夜でコンピュータと格闘した後の重労働は続けているうち腰に異常をきたした。それで無期限に休んでいる。留守番電話の幾つかのメッセージの中には港に近い古びた倉庫街の一角にある引越会社の社長からの仕事の依頼も含まれているだろう。コンピュータの会社も訪問販売の会社も辞めてしまった。彼は芋虫のようにごろごろとフローリングに横たわっている。空腹で動けなくなっているような気がした。もう何時間も同じような状態が続いている。この部屋を知っているのは白川と鳴海の二人しかいない。いや、もうひとり会社の上司も知っているが彼とは口論してそのまま別れているので間違ってもここに来ることはないだろう。彼の死体を発見するのは白川か鳴海か或いは好人物の大家くらいしか考えられない。それにしても電話がひっきりなしに掛かってくるのには驚くばかりだ。動けなくなっても眠りに落ちることはあまりない。すぐに起こされる。もう何曜日なのか、何時なのかもわからない。壁時計も腕時計もない、それでも太陽の角度から昼過ぎであろうことは推測できた。気が付くと彼は立ち上がっていた。食事することだ。小銭を探した。札はないのはわかっていた。小銭を見苦しく探し回った。部屋の片隅に落ちていることなどは考えられない。財布には数十円しかない。彼は鳴海に電話して少し都合してもらうことに簡単に決めた。菓子パンのひとつくらいは食べることができそうだ。ここに来てからは水道水を飲むことがやたらに多い。電話すると鳴海は簡単に出た。どうやら幸福なことに土曜日か日曜日であったらしい。借金の申込みをすると苦笑しながらも快諾してくれた。電車代もないのでこっちに車で来てくれるという。返すあてのない借金をまた重ねてしまった。彼は頭がくらくらした。彼は安心

したからか、また眠りに落ちた。チャイムの音で起きた。福音に違いなかった。ドアを開けると蒼ざめた背の高い鳴海が覇気なく立っていた。「思ったよりも元気そうじゃないか」彼はぼそりと言った。「白川また入院するって」「へえ」「訊いてないのか？」白川は原因不明の奇病に取り憑かれていて入退院を繰り返していた。月に一度くらいは電話で話す。入院すると原稿が捗るので悪くはないとも言っていた。けれども勤めはどうするのだろうか、と思わなくもない。

「まあ、君のような公務員はいいよな、で、なんで今日は空いていたの？」「今日は土曜日だからさ」彼は手の切れそうな札を二枚渡してきた。礼を言って借用書みたいなものを書く。興味がないのか、鳴海は彼の職に対して尋ねてくることはなかった。以前の訪問販売の出版社についてもコンピュータ会社についても。彼が白川と一緒に出していた同人雑誌についてもほとんど無関心だった。学生の頃は鳴海も顔立ちと釣り合った端整な詩や学術論文を書いていたのだが。マンの『ブッデンブローグ家の人々』をホルストを聴きながら教えてくれたのも鳴海だった。長身で色白で髪の先端がくるくるとカールしているのが印象的な鳴海は彼からすると女性に人気があって当然に思えたが数カ月前に会った時には、意外な事に彼女が欲しいという言葉を聞かされた。真に受けた彼は、眞子を紹介した。都会のラウンジで会う三人は真っ白な卓に座って噛みあわない会話と薄笑いで数十分を過ごした。鳴海と眞子はかわるがわるに彼を訝るような視線で捉えた。鳴海と眞子は会話することも実現しなかった。眞子はスチュワーデスに憧れて英語を猛勉強していてそのうちに転職するといきまいていた。容姿は悪くはなかったが自己主張が激しすぎる、彼と鳴海よりも三歳下の彼の会社の後輩だった。そればかりか彼らと同窓だった。彼には鳴海と眞子は似つかわしいと勝手に思い込んでいたが引き合わせてみるとほとんど同様に拒絶の意思を示してきた。彼には理解できない暗黙のルールが美に恵まれた彼らにはあるのかもしれなかった。それとも彼らだからこそ分かる運命の直感のようなものが存在するのかもしれない。人は安易に通俗を軽蔑するが通俗の中には動かし難い真実を含んでいるものもままあるのを彼は思い知らされた。

　彼は鳴海が眞子を気に入らない理由を好奇心から問いただした。空腹も忘れるくらいの関心事だった。「まあ、まあ」問いかけに鳴海は答えなかった。「それよりも何か食べに行こう。ナポリタンとピザが食べたいな。君もずっとなにも食べてないんだろう」彼はぐるりと部屋を見渡した。「本当に何もない部屋だな。前の部屋よりよっぽどましだけど。なんだこりゃ。コンピュータ？」「ああ」ほぼ唯一の家財道具。そして不思議な贈り物だった。去年の年末に売り出しの商店街で買ったのだが何カ月たっても引き落としされない。もっとも口座に金がなかったのだが。そのうちローン会社から催促されるだろうと思っていたが契約書類を間違えているのか何も言ってこないのだった。「これって、何に使うんだろうな。ゲームか。会社のコンピュータと違ってまったくわからない。電卓よりも早く計算するような気がしないでもないが」「ふうん。タダで貰っても仕方がないわけか」「三十万もしたよ。催促が来なくて助かったよ。頭金の五千円はいれたけど」「なんでまた、そんなのを買ったんだ？」「あの時はコンピュータの会社に勤めてたから家で勉強しようと思っていたけど手にいれてみるとオペレーションシステムが違うからどうにもならないんだよね」会社ではウインドウがあったがまだそこまではパーソナルでは実現されていないらしい。鳴海は大笑いしていた。「まったく計画性の欠片もないなあ」

彼と鳴海は外に出た。黄昏れる街路樹の合間に真っ赤なプレリュードが燦然と輝いていた。鳴海と共に乗り込むと鳴海は猛スピードで一方通行を逆走していた。ふたりは笑い転げた。

虹色に光り輝く神戸湾を見ながら高層ビル内のレストランでオニオンサラダとビーフとオイスターの生やフライを食べていた。鳴海の趣味だ。「牛丼屋でも良かったんだけど悪いなあ」「気にするなよ」ワインを傾けながら鳴海は言う。「職場は嫌な奴ばかりでね。つくづく学生の頃の仲間はいいなあって思うんだよ、最近」「富樫はどうしてる？」彼が尋ねると鳴海は言う。「たまに会うけどあいつ結婚するらしいぞ」「相手は？」「可愛いけどそれだけで品のない女だ」「手厳しいね」「まだ若いから仕方ないけどある程度の教養は必要だね」「ふむふむ」彼は批判することなく彼の言葉を受け入れていた。鳴海の自由闊達な発言は受け入れられない場合が多いのだろう。鳴海は安心して語っていた。彼は彼の生活を鳴海が批判しない代わりに彼の性格を批判するつもりはなかった。まだ学生の頃はよく衝突したものだが、あれから数年たち彼の性格を十分に呑みこんでいた。剣呑さは以前と変わらず薄まってはいないのだった。

けれどもどうして眞子を気に入らないのかはどうしても訊きたかった。

「やっぱり眞子も品がないのかな」微笑しながら彼は鳴海に尋ねた。「あの娘というかあの人はやっぱりそぐわないでしょう、僕には」「なんだ、そんな謙遜は君には似合わないぞ」「直感として思ったんだな。彼女は野心に溢れている。彼女の野望を満たしてくれる男を望んでいるはずだと。それに比較して僕は自分の生活を静かで美しいものにしたい。彼女は美しいけどそれは磨いたものではなくて与えられたものに過ぎない。彼女にとっては当たり前なんだよ」「それなら君に似てるじゃないか」「それは嫌味な意見だなあ。そういう君の妙なおせっかいがあったら大抵はぶち壊しだよ」鳴海は笑っていた。「ああ、よくわからない」「じゃあ、わかりやすく言おうか」「言ってくれ」「眞子さんには男がいる。そして僕にも彼女がいる、それだけのことさ。もし仮にあの瞬間はいなかったとしても時期をずらせば必ず誰かがくっつく。僕と彼女がくっつくには運命的な要素が必要だった。そして僕は彼女に何等かの不幸も嗅ぎつけた。おそらく眞子さんも僕に不幸の芽を見出したはずだ。そういう顔つきをしていた。君の媒介なくして結びつかない者がどうして偶然を超えられるのか」「なるほどそういうことか」読まれていたのだ。彼は鳴海の洞察力の鋭さに脱帽した。「失礼だけど眞子さんの男は君ではないことは明白だな」「それは言うまでもないよ。俺は嫌いではないけど今の俺の状況ではとても手が届かない」「それはちょっと違うな。状況がどうであれ、なびくものはなびくし、そうでないものはどうにもならない」彼は黙り込んだ。お手上げだった。追い打ちをかけるように鳴海は続けた。「眞子さん、何か文学とかやってるんじゃないのと思ったよ」それも当たっていた！　眞子はトルストイを相当に読み込んでいたのだった。「さあ」彼はこの話はここらあたりで打ち切ろうと思って誤魔化した。派手な服装の女たちを交えたおそらくは合コンだろう団体が一斉に席を立って店内は寂しくなった。ピアノ演奏もショパンに変わっていた。

別れ際に鳴海は言った。「パソコン、売った方がいいかもな」

引越の荷物運びはきつかった、とはいえ全然行かなくなったことを彼は多少は後悔していた。給料は日当で貰えるからであった。一日、働いて得た一万数千円の金をパチンコで

すってしまったことも何度かある。二倍に増やしたことも何度かあったが、やらないほうが無難なことは間違いなかった。鳴海と別れた直後から今度は貸してもらった二万円が尽きる前に何でもいいから職を探さなければならないと焦り始めた。居てもたってもいられなくなって彼は闇に沈んだ街を歩く。魚河岸の通りの向こう側は関西では有名な色街でソープランドが軒を連ねている。呼び込みが毎日のように声を掛けてくる。そのたびに住人ですからと答える。何カ月か経つと住人らしくなったのか声を掛けてこなくなった。その界隈で働こうとは思わなかったから反対側の山の手の路地を歩く。閑静な住宅街が続く。営業している店の明かりはレンタルビデオ店だった。人気はない、在庫も少ない。ただ入り口にはアルバイト募集の張り紙があったので彼は吸い寄せられるようにはじめて店内に入ってみた。ビニルの焼けたようなまさに饐えた匂いが充満していた。

「ここで働きたいんですが」店員におもむろに訊いた。飛び込みの訪問販売をしていたので初対面の人物に話しかけるのは平気だった。眠たげな店員が急に眼を見開いてじろじろと彼を品定めした。何も言わない。「バイト募集してるのですよね」「ううん」店員は考え込んでいた。「あなた何してる人？」中国人の言葉遣いのような問いかけ。「なんでアルバイトする？」「なんでって家から近いから」「それだけ？　仕事してないの？　アルバイトじゃなくてまともに職に就く気はないの？　それとも掛け持ち？」こういう場合相性が合えば余計な問答は必要ない。訪問販売も不可能が可能になって商談に結び付く場合が多かった。たいていは門前払いで終わる。「わかりました。他を当たりますよ」彼はあっさり引き下がった。店は神戸にいくらでもある。明日、ゆっくりと探そう、そう思ったが……履歴書も持たずにいきなり駆け込む自分が何かに蝕まれていると意識せずにはおれなかった。

翌日に日が高くなってから起きるとき夢がまた始まったと思った。目覚めているときが夢であり悪夢なのだった。そして鳴海と会っていた昨日もいつの間にか茫洋とした蜃気楼のなかの市場にしか思えなかった。あれも夢だったのか。確認のために財布の中をみるとやっぱり二万円はある。返済の期限はいつなんだろうかとも思う。朝方にまた電話がなっていた。電話に出なくとも請求書が郵送されてくるからたいした支障はない。ただコンピュータだけは請求書すら来なかったからあれはプレゼントされたに違いなかった。すると何やら誇らしげな気分にならないこともない。まだツキが残っている。こういう思考というのはかなり追いつめられているんじゃないかと思わないでもないけれども。彼は、以前にも膨大なコンビニの弁当を短時間で車両に詰め込む作業に従事したこともあったが長く続かなかった。広告取りの会社、学習塾、事務コンピュータを販売してる会社の汎用機のメンテナンス事業部などに内定したこともあったがいずれも断っていた。その理由はいずれもその場の採用という形式がいかがわしく感じたことであった。書類選考も何もなかったのだ。おそらく長続きしない仕事内容なのだ。もう職を転々とするのはやめてじっくりと就職活動したいと思ったからだ。何をしたいかも明確でないからそれもこの際はっきりさせたい。徹夜続きのコンピュータ業界や訪問販売の世界には懲りていた。ただ、当面の金が工面できなかった。失業保険の受給までは待っていられない。三カ月の待機期間に干上がってしまう。家賃だけでも月に五万は必要だった。と、何度も同じことをぐるぐると考えていた。かといって家族に電話するのも気が引けた。二年ほど音信は途絶えていた。父と不和になっていた。不和になって家を飛び出す直前に志賀直哉の『大津順吉』を読んでいた。シチェーションが類似していた。新興宗教の信者である香澄と彼が交際するのを

父が認めなかった。言うまでもなくその宗教が父の資本主義と相いれなかったからである。結局はいろいろあって後、香澄とも破局した。そういったもろもろの過去は彼方の出来事になりつつあった。もはや、思い出すのも稀だった。留守番電話に一万回着信があったらその一回くらいは香澄からのものであったかもしれない。けれどもその一回は口論するだけに終わるだろう。口論に終始するだけなら一緒にいる意味などないのだと彼は思っていた。こんなふうにすっぱりと過去を断ち切れるのはひとつには元号が昭和から平成に変わったからかもしれなかった。

アルバイト情報誌も活用しないではなかったが、ごく短い期間だけ働くというものはあまりなかった。それならば自宅から近い場所で何処かないものかと思った。そう思うこと自体が一般の常識からずれているのは分かっているが彼の感情を変えることは彼自身の力では無理であった。白い電話機には赤の着信ランプが幾つも点灯している。その中の幾つかは眞子からのものであることは予測できた。それでも眞子とは話す気にはなれなかった。チャーリーとの不倫話を聞かされてからは眞子を避けていた。彼の抱いていた眞子のイメージが崩れ落ちた。修復ができなかった。彼は眞子を好きだった。何度かは愛したこともある。彼が眞子を鳴海に引き合わせたのも眞子にチャーリーを諦めてほしいと思う気持ちからだった。しかし、それも過去になりつつあった。香澄と同じように眞子とも口論が激しくなった。眞子は興奮して言った。彼女がふとしたはずみからふたりだけの部屋でスカートを脱ぎ捨てたのは彼の容貌が学生時代に付き合っていた男と似ていたからに過ぎないと。私が愛しているのはチャーリーだけだと確信をもって彼に宣言したために彼の眞子への愛情は急速に萎えてしまっていた。それからは彼は眞子の途方もない野望を書きつけるメモ帳に成り下がった。何度も電話してきてはチャーリーとの不倫の報告をしてくるのだ。眞子の声は度外れて大きく、耳が痛くなった。家族が傍らにいても平気で不倫話を日本語でしていた。半ば以上狂っていた。だいたいその男には妻もいるのだ。そして彼はその夫婦も知っている。何度か食事もした。彼は眞子に諦めるように説得した。チャーリーとも英語で会話した。彼の拙い英語で奥さんを大事にしろよと言ったつもりだったが伝わっていたのかどうか。元はと言えば英語を習得するためにチャーリーを家庭教師に雇ったのだ。ネイティブのオーストラリア人でありわかりやすくきれいな発音が耳になじみやすく心地よいのと紳士らしい振る舞いや細やかな愛情表現やビッグスマイルにすっかりいかれてしまったのである。どこまでチャーリーが狂った日本の才媛でスポーティーな眞子に本気で入れあげているのか確かめたくてたまらなくなっているのだった。どうにも不可解なのはチャーリーの妻、キャシーがイギリス王室のダイアナ妃に似た金髪の美女だったことだ。キャシーは眞子よりも数歳は年上で彼よりも年長だったが、まだじゅうぶんに若く、魅力的だった。ふたりの間に子供はなかった。チャーリーとは不仲になりつつあることはそれとなく知れた。自分たちの愛を見せびらかすような仕草を見ることはなく始終落ち着きなく不機嫌な表情を浮かべていた。キャシーは日本には興味がなく日本人を見るのも嫌らしい。なぜ彼らが日本に滞在しているのかわからない。宗教上のトラブルを抱えているのかもしれない。日本にいる西洋人の多くは宗教あるいは政治上のトラブルから潜伏先として選んでいる、眞子は外国人のパーティに参加していて、そういった事情に詳しく、そんなことまで彼に告げてきた。

彼らとの関係は、彼の引越や転職とともに消えてなくなった。ほとんどあらゆる関係が

なくなってしまい彼は孤独だった。街の底を漂流して数カ月になる。物憂げな気分に包まれたまま彼は扉を開けて街の中に一歩を踏み出して行った。【田中角栄を殺せ】宇宙人の経営する自動車修理工場が先日訪れたビデオ店から数百メートル先に現れた。何年か前にドキュメンタリー映画で観ていたから、ここだったのかと少し立ち止まって眺める。店は開いていたが誰もいない。たとえ募集していてもそこは物騒な気もして働く気にはならない。更に進むとＪＲの高架に突き当たる。そこから元町までガード下には雑多な商店がびっしりとあった。旅行代理店、土産物屋、不動産屋、理髪店、ケーキ屋、古書店、乾物屋、中古の冷蔵庫や事務機や洗濯機を売るバッタ屋。そこまで来て彼は立ち止まった。なるほど家電は売れるものなのかと。いざとなったらパソコンが売れる。でもこの店は高くは買わないだろうと商品を見てそう思った。茶色に変色した洗濯機が数千円で売られていた。パソコンはなかった。店はどれもこれも十坪にも満たない。けたたましい呼び込みの連呼がテープから流れ、自転車の急ブレーキ音がそこかしこで発生する。音に過敏になっている。部屋の中があまりに静寂なためか。視覚と聴覚のバランスを欠いた。見るものは興味深いが耳に入ってくるのは疎ましい。アルバイト募集をしているのかは張り紙で判断していくが意外にもほとんど張り紙を見かけない。ひとがひとりやっと通れるくらいの狭い通路の両側に店が並んでいる。不意に列車が通り過ぎる轟音がして店の木製の引き戸がガタガタ揺れた。キーンと耳鳴りがして季節感を失った。体内の調整が崩れたらしく外気に関係なく暑くてたまらなくなった。キムチを売っている店で今度は立ち止まる。またここへ来た時にキムチを買おうと思う。衣料店も覗く。もう数カ月も靴下やシャツを買っていない。就職してからはマメに洗濯をしている。この店もまた来よう。今は持ち合わせがない。精肉店の前では誘惑に負けそうになった。食堂も幾つかあった。出来立てのロールパンの香りも漂ってきた。薬屋もある。彼には何もないがすべてを我慢しなければならない。そうしていよいよ商店街も大通りに突き当たり終わりという頃には彼の意識は朦朧としてアルバイト募集の張り紙だけを見るようになっていた。目指す張り紙は最後の店にあった。そこは模造の拳銃やライフルがショーウインドーに飾られてありアメリカの旗と旭日旗が交差して飾られていた。米軍払い下げ、自衛隊払い下げと謳い文句があちこちに正札代わりに貼ってある。迷彩服が無造作にワゴンに入れられていて洋品店と同じように吊り下げられていた。ミリタリーグッズが並ぶ店内であったがなんといっても多いのは拳銃だった。それらも模造ではなさそうだった。発射できないだけで本物なのかもしれない。重量感があり、ところどころ塗装が剥げて凄みのある艶があった。最初の驚きは徐々に嫌悪感に変わった。それで逡巡して店を出て立ち去る素振りをみせたりまた戻ってきたりした。やがて彼は、彼を始終、目で追いかけていた店員に声を掛けた。

「こちらで働きたいんですけど」

「ということは武器や戦闘服に興味があるってことなんですね」意外にもやや親しげだった。だが顔はちっとも笑っていない。彼は答えない。

「これ、アメリカの護身用ピストル、小さいでしょう」

彼の掌に載せる。彼は何かあった時のために眞子にピストルをプレゼントしようかしらんとも思った。すでに彼の中では殺傷能力のあるピストルに変化していた。

「ずっと前に永山則夫が四人を殺害したのと同じものなんだけど、知ってる？」

「いや、その永山っていうひとは本を書いてるから知ってるけど四人も殺したって知ら

なかった」
「あ、そうなの」店員は当てが外れたようだ。「あなた永山のようなこと考えてない？」
店員は畳み掛けた。「ここには本物の銃弾もあるし、その気になればモデルガンを改造して使用することもできるとかさ。たとえばここにアルバイトで潜入すればいつでも手に入るわけだ」
「いやあ。ピストルなんて興味ないんだ」
「興味がなかったら仕事にならないじゃん。相手はガンマニアばっかりだよ」
「じゃあガンマニアは改造したりしないのかね？」
「しない。今までに聞いたことがない。でも普段、拳銃と無縁な人の方がむしろ危険なんじゃないのかと思うことがあるよね。永山みたいにさ」
「なるほどあなたの言うとおりかもしれない」
「というわけであなたをアルバイトとして採用できません」
彼は会釈もせずに店を出た。

気が付くとがらんとして人影もまばらなパチンコホールにいた。初夏だというのに冷房が効いていて心地よかった。暑苦しさは緩和できた。数十台のスロットマシンが並んでいたが誰も座っていない。数カ月前には給料が入るとすぐに機械に札を入れていた。尾崎豊の『卒業』が店内に鳴り響いていた。転がり続けるってこういうことなんだろうな、と思う。軽いつもりで千円札を財布から出して機械に流し込もうとした時にブレーキがかかる。感情を抑制する。このほとんど最後の二万円を使ってしまっていいのだろうか。負けるとき、たいてい二万円ほどはすぐに溶けてしまう。それならば、いつも気になっていたあの方法をやってみよう。ワイルドキャッツという台は当たりを引く直前にチェリーが左リールに位置する場合が多い。だから、その状態で放置してある台を狙い打てば初期投資が少なくてすむ。いつもそう思いながらなかなか実行できないでいた。思いつくとすぐに台を探し始めた。少しパチスロをする連中なら誰でも知ってる。だからその状態で放置されている台などほとんどないに決まっていた。ワイルドキャッツは瞬く間に確認できた。するとそれだけでは満足できないので彼は隣接するホールや地下にある店、商店街の中の店と次々に血眼になってワイルドキャッツを探して歩いた。十軒以上も回っただろうか。台にして三百台は確認した。ようやくチェリー停止台を発見した。胸が高鳴ってきた。もちろん確率が多少高くなるだけで絶対に当たるということはない。だが探し回ったということもあって使ってはいけない金なのに彼は手を付けることになる。その快感はこの上なかった。地獄の窯の上で踊るような気分だった。どうとでもなれと自棄になってカネをつぎ込みレバーを引き、ストップさせる。キャッツが停止、次も猫、そして三番目を狙って打つと、あろうことか見事にそれは停止して大当たりになった……
ワイルドキャッツは当たり出すと止まらない台であった。十回連続二十回連続もある。一回で六千円ほどになるから十回程度出したところでやめにした。彼の周囲はコインを山盛りに入れた箱が積みあがりそれを見た他の客たちがぽつぽつと集まってきていた。十万円弱にはなったはずだ。彼の心持ちは一気に変わった。何か思いがけない力を得たような気分になった。この方法は使えるじゃないか。彼は内心ほくそ笑んでいた。元のアルバイト先の社長も作業服のまま打っていた。「最近見かけないと思っていたらこういう稼ぎ方を

見つけたんだね」「いえいえ、とんでもない。偶々です」彼は上機嫌もあって慇懃に応対した。仕事がきついこともあったが、釜ヶ崎の暴動に参加するフリーターや元自衛隊員や元力士といったその会社の連中とは反りが合わないのも辞めている理由だった。何かと柔弱な物腰の彼を威嚇して彼に負担をかけてきて一見、要領がいい彼らに彼は辟易としていた。「また人が足らなくなってきたんでたまには来てくれよ」会社が長田にあるから近いには近いのだがそこはどうにも気が進まない。とてもではないが毎日できるような体力は持ち合わせていない。「最近、ちょっと疲れてきて」「きついか？　慣れだよ、慣れ。まあ引越だから平日はそんなに仕事がないんだけどね」「考えときますよ」懐が深いというか細かなことは気にしないというか人懐っこい社長の笑顔は誰にでも等しく優しく見えた。「では失礼します」

プログラミングの徹夜作業明けの土日に引越を夜十時までして帰ってきて小用をすると痛みはなかったが新しい便器は真っ赤に染まっていた。大量の血が混ざっていた。驚いて何か悪いことでもしたような感覚になった。それから引越は休みがちになった。プログラミング作業はだんだんと責任が重くなって途轍もなく大きなプロジェクトに絡んでくると大方の人は辞めてしまう。彼の仕事は学習塾に始まり、ＪＲや自衛隊の仕事をして最期は造船所だった。そのシステム変更は難攻不落だった。誰がやっても全く歯が立たず彼の先輩たちは続々と退職していき彼も眞子を捨ててその道を選んだ。

思いがけずに大金を手にしたので商店街に引き返して欲しいものは全て購入した。

最後にパン屋兼喫茶店でクロワッサンと珈琲を注文した。彼のにやけた顔が窓ガラスに映った。やっと悪夢から解放されたのだろうか？　それは見通しがちょっと甘いんじゃないかと思い直していた。とにかく軍払い下げの店にまで報復できたのは望外の喜びだった。あいつ気に入らない奴だな。店員のあっけにとられた顔といったらなかった。痛快だった。久しぶりに血がたぎった。彼は興奮して、夜ではあるがまだ大丈夫だろうと入院中の白川に連絡を取ってみることにした。

「ほぼ毎日電話してるんですけどね」白川は苦笑しながら言った。「なんで電話に出ないんですか？」「まあ事情があってな、留守番電話も再生してない」「書いてますか？　僕は『アトリエの科学』から若者文化についてのエッセイの依頼が来て非常に困ってます。なんせ入院中でぜんぜん取材ができないし、ジュンク堂に行くことさえ許可されないんで、そういうこと手伝ってもらえたら有難いんですけど」「あまり気が進まないなあ」「ほとんどお金にもならないです」「だったら断ったほうがいいかもしれないよ。まず病気を治すことに専念したほうがいいと思うんだけど」白川は言い淀んでいた。「どうやったら連絡くれるんですか？」「じゃあ、三日に一度くらいは電話するよ。エッセイは協力できないけど」「いろいろ差し入れしてほしいんですよ。本や雑誌も、それから就職情報誌とか」「今度一度行きたいんだけどこっちも失業中で大阪まで行く電車代もないくらいだよ」「なんでまた神戸なんかに行ったんですか？」それから彼らは鳴海の話やほかの同級生の話題で小一時間ほど話していた。「入院は長くなるの？」「今回は長いですね。手術したんですが、術後の数値が良くないようでやり直しになるかもしれんです。内臓のあちこちが調子が悪いみたいで。詳しいことは教えてくれないんですよ。わからないというか。その、病気に関しての本も集めて読みたいから図書館で借りてきて欲しいんですよ。できたら医学部のある大学図書館で」「わかったよ。キミのためだ。やってみる」そして病院の受付の看護婦からいい

加減にしてくださいと注意される声が聞こえてきて電話は切られてしまった。その後、大家にも電話して家賃を支払うことになった。とりあえずは一カ月分。大家はそれほど嫌な顔もせずに家賃を受け取りに来た。そればかりか彼女がいるのなら連れてきて同居してもいいよ、なんて呑気な事を言っている。

翌朝は意気込んで六時に起きた。生臭い風に起こされた格好だ。その元凶である魚市場に行こうと決めていた。パチンコホールの開店は九時半でありまだだいぶ間があった。さすがにほとんどの金は使い果たしていた。残ったのははじめの鳴海の二万と初日の勝分一万五千円。眞子にも電話した方が良かったのかと少し未練たらしく彼は思った。

たいてい目覚める頃には終わっているので魚市場が活況なのは初めて見る。入り口の店には人の背丈ほどもありそうなブリが垂直に真っ二つにされ、ヒラキになっていた。ブリじゃなくてマグロなんじゃないかと思ったが正札にはブリとあった。ヒラキといっても骨のない方は細かく刻まれて販売され、残った太い骨つきの方は天井から逆さ吊りにされている。目の前にぶら下がる妖しく光る巨体はこの店では三体。隣の店では五体。どの店も同じように獲物を見せびらかしていた。行き交う中老の男たちは一様に白いエプロンと長靴姿で、ブリを背負って歩いていた。重いのか顔の皺にも力が入る。古代人みたいだ。ブリの目玉は苦労する人たちを嘲笑していた。華麗にブリを捌いていた。鮮血がほとばしって思わず彼は目を背ける。まだ子供のような見習の男がコンクリートの土間をホースで水を撒いて血を洗い流している。微量ではあるが逆さのブリたちからも血が流れていた。昨日の流れで細かく区切られた店をひとつひとつ眺めるとほとんどの店がアルバイトを募集していた。家から近く午後から求職活動できるのでうってつけなのかもしれないが……それから彼は気分を変えて例の喫茶店でクロワッサンと珈琲を頼んでポケットに忍ばせておいた今となっては顧みられることもない堀辰雄の短編集を読んでいた。その本の中には精神に不可欠な栄養素があると彼は勝手に解釈していた。

九時が近くなって彼は落ち着かなかった。そしてパチンコホールの前の行列に並んでいた。考えるにこの周辺は人口に比較してホールの数が多すぎるのだ。たいていの店は閑散としている。たとえモーニングサービス目当ての行列ができていても百人もいないだろう。もちろんモーニングもやらない。やるのは昨日の再現で左チェリーの放置台である。だがそんなものが落ちているのだろうか？　いや確かに昨日は実際落ちていたじゃないか！　彼は葛藤した。昨日、落ちていたものが、今日も落ちているだろうか。ワイルドキャッツに限らずに全般に見渡せば落ちていないこともないが、連続して大当たりを引く機種ではないのでたとえ一度当たったとしても二度目までに出玉を呑みこまれてしまう。その点、ワイルドは大当たり後一回転、或いは三回転くらいまでまたチェリーを引き戻して大当たりするのだから。その割に人気機種ではなかった。普通に打っているとちっとも当たらないからだろう。

結局、ホールを二十も回ってワイルドキャッツの左チェリー落ちを二台見つけて小躍りして打ち込んだが、単発に終わり一万五千円増やしただけにとどまった。

帰宅すると会社に変名で電話した。眞子を呼び出してもらう。気づかれているかもしれないが、気にしない。「あら、何度も電話したのよ！　ちっとも出ないんだから。あたしの留守電聴いてくれた？　この電話じゃまずいから、どこかで会って話さない？」「ああ、ビヤホールかあ。扇町だったかしら。去年、忘年会で行ったとこね。家から近いしいいよ」

「留守番電話、再生できないの。もう、いろいろ告白してるのに！　え、たくさん留守電があり過ぎて消えてしまった？じゃあ何にも知らないのね、わかった。明日の七時にビヤホールで？　え、チャーリー？　連れて行かないわよ。だいたいもう日本にいないわ。就労ビザが切れてるの」彼は電話を切った。会うのなら電話で話すこともないのではないかと思ったのだ。どっちにしても眞子とどうこうする気はなかった。今の生活を説明するのも煩わしい。

翌日も朝からワイルドキャッツを探しにいったが、とうとう落ちている台は見当たらず彼はやはりアルバイトを探すべきだと思い始めていた。約束があったので電車に乗ってビヤホールに向かった。日本航空の関西本社ビルは城郭のような威容を誇っていた。小雨の御堂筋を歩いた。雨の多い季節だから仕方ないがどんよりと曇った空が重苦しく思えた。ビヤホールの入り口で煙草に火を点けて眞子の来るのを待っていた。眞子は少女体型の香澄とは違って肉感的な逞しい身体つきだった。趣味がスキューバダイビングとスキーだったから。だがある種の男、すなわち金持ちの男友達がいないと彼女ひとりではそういった趣味をすることはできないそうだ。だから本も読んでいる。以前そう話していた。眞子に再び会うことになるとは思わなかったが懐中のずしりと重いプレゼントできっぱりと彼女とは縁を切ろうと思っていた。何ともならないのだった。本当は彼女も貧しい。眞子が家に帰りたがらないのは家に借金の取り立てが押し掛けてくるからだった。借金は眞子の父親が或る会社の保証人になって作った。鳴海は暗い何かを嗅ぎつけていたのかもしれない。彼と眞子を結び付けているのは貧困であったのかもしれない。

店の前に一台のタクシーが停まった。後部のドアが開き白いワンピースの眞子が颯爽と現れる。彼女の脚は少し肉付きが良すぎる。無造作に引いたルージュが毒々しい。

「明史！」眞子は彼の名を呼んだ。「懐かしい！」ひとしきり彼らは貪るようにビールを飲みフライドポテトを食べた。天井が高く交響楽団が使用するホールのような建物だ。喧噪で大きな声でないと何を言ってるのかよくわからない。彼は眞子の右手を掴んで肘で眞子の乳房の辺りを愛撫していた。「今日はそういう気はないのよ。何？私に未練でもあるの？」だが眼差しはとろけるように優しかった。彼は眞子がちっとも変わっていないのに安心した。彼女と話していると今の生活を片時でも忘れることができた。「本当に留守番電話を聴いてないの？　もう！」「聴いてない」「それなら言うけどＳＧＣはあたしもやめた」ＳＧＣというのはコンピュータ会社だった。「だって昨日いたじゃないか」「辞めているんだけど引継ぎとかクライアントの関係もあって今月末までは出社することになってるの。ああそれからね、日本航空のスチュワーデスもダメだったわ。最終選考まで残ったんだけど落とされた。あたしの身辺を調査したんだよね、たぶん。毎日、借金取が押し掛けているようじゃダメだよね」「そうかもしれん、そうでないかもしれないけど」「そうに決まってるでしょ！」「明史も甘い考えは捨てるべきよ」「じゃあいよいよチャーリーと？」「ええ。あんたがどうしてもあたしを守るって言ってくれたのなら考え直したかもしれないけどあんた無理でしょ。自信なさそうだし。だいたいさＳＧＣなんかでプログラマーなんてやってちゃダメよ。世界に向かって行かなくちゃ」「世界かあ」「それに友達を紹介するなんて最悪じゃないの」「鳴海か？　あいつは良い奴だよ。公務員だし真面目だし」「あの人には大きな不幸が潜んでいたの。なんかピンと来たのよ」「でも俺の思うには君はチャーリーにぞっこん惚れているのはよくわかったな。眞子が何と言おうと嘘にしか聞こえない」「あくま

で優しいのね。あなたは本当に憎たらしいくらいにあたしが付き合っていた先輩に似ているのよ。でもさ、あいつもやっぱりダメになってるんでしょうね！」「うるさいなあ。俺は俺のやり方で頑張るよ」「違うの違うの。女はね、心底好きなのはダメな奴なんだって！」「まあ、どうだっていいよ。それでこれプレゼント。お別れの」「へえ」彼はきちんと包装していた。小箱に入れてリボンを結んでいた。「開けていい」「どうぞ」眞子はリボンをほどいて包みを剥ぎ取る。中から２２口径の黒光りする短銃が現れた。眞子は瞬間、うっと呻いたが取り出すと「かっこいいじゃん」と眼を輝かせた。それから急に彼の口を広げて銃身を口に突っ込み打つ真似をした。「これ弾はでるの」彼は答えられない。通りがかったボーイが眞子に注意した。「ちょっと悪ふざけはよしてください」周囲の客たちの冷たい視線が眞子に集中していた。「ごめん。みんな」テーブルの上にコルトを置く。モデルガンといえ見た目は本物と変わりないのでかなり不気味に映る。「テーブルの上に置くのもやめてください！　本物？　じゃあないですよね」「もちろん」きまり悪いのでビールとローストビーフを追加で注文した。「チャーリーと一緒になる？」「ええ。離婚が決まったの。チャーリーの」「そうなるだろうって思ってた」「やっぱり」「ダイアナは諦めたんだね」眞子は彼の胸の煙草をまさぐってきた。「あたし煙草も吸うの。スキューバの為とスチュワーデスの為に禁煙してたけど」彼は火を点けてやる。「キャシーもいい子よ。でもすっかり冷めてしまったの。チャーリーがね。あんた、あたしが略奪したとでも思ってるでしょ。それは間違い。あたしと知り合う前からあのふたりの関係は壊れていたの。でもキャシーは日本にまで追いかけてきたからね、関係が戻るかもしれないって思わないでもなかったけど」それから何枚か写真を取り出した。青い海の浜辺のコテージと残雪の山の中腹のコテージの写真。チャーリーと小型ボートの写真。澄み切った海が旅行会社のパンフレットを想像させる。「これふたつともチャーリーの家の別荘よ。日本にこんな人いる？」「それはそうなんだけど」「あたしは運命論者じゃないわ。アンナ・カレーニナが間違っていることを証明してやるのよ」トルストイは眞子に反発心を起させていたのだった。「来月の中ごろには出発するわ。さようなら。そしてありがとう」眞子は彼にキスをした。またもやボーイが見ていて何か言いたげな顔をしていた。

とうとうワイルドキャッツが裏切り始めた。チェリーが出ていても当たらない。自棄になって普通に打って一万円負けた。それ以上はできなかった。「今日はやられてるようだな」と引越屋の社長。「真面目に働いた方がいいんじゃないのか。時々、電話してるけどちっとも出ないな。そんなにつらいか。俺のところは？」「体力がないですから」とだけ彼は答える。

家に戻りパソコンを眺める。図書館で『プログラミング入門』を買ってきて入力してみる。二時間かかった。だが動かなかった。既成のソフトを入れれば動くことは分かっている。だがそれで何ができるというのだろう。ゲームか家計簿やメモ、そういったものならばノートで十分だ。ゲームはしない。白川の病気の本も借りたが市立の図書館からなのでそれほど専門的ではない。眞子と別れてからは人恋しさを感じる。気持ちが落ち着かない。落ち着かないのはカネが無くなってきたこともある。

電話を掛けていた。鳴海にパソコンを売るから来てくれと告げた。今日は仕事を休んだよと鳴海は言った。頭が痛くてね。体調がすぐれないんだ。明日にでも来てくれと彼は頼

んだ。少し遠くてパソコンが運べないんだよ。鳴海は渋った。行けたら行く。昼の一時に行かなかったら無理だと思ってくれ。相変わらず電話には出ないんだな。何度か電話したよ。おい聞いているのか。鳴海はそれから何かぶつぶつと感情を昂ぶらせてつぶやいていた。彼がどれほど耳を澄ませても聞き取れないほど早口で高音に響いてくるので自分の耳が壊れてしまったのだと思った。何度か聞きなおしたが鳴海が怒ったようで、わからなくても訊きなおすのはやめて受話器を置いた。「まあ無難なところはやはり引越なんだろうな」彼は声を出してつぶやいてみた。聴こえる。自分の声が明瞭に。耳はなんともなかった。

次の日は、ジョイスのユリシーズを読んでいた。ブルームは広告取りだ。彼も若い頃はスティーブン・ディーダラスだった。美学意識が冴えていた。芸術理論を構築して鳴海とやりあったものだった。いまは限りなくブルームに近くなっている。だがブルームだったら眞子と最後だから寝ていたと思う。彼は求めなかった。求めていれば眞子は受け入れていたに違いない。欲情がそこはかとなく感じられた。だが後先顧みず未練を助長することを怖れたりその場限りの快楽を貪って真にブルームになるのを怖れたりした気持ちが彼の感情にブレーキを掛けていた。彼が広告取り仕事を避けているのはブルームを避けているからだった。ブルームは引越の仕事はしないだろう。

翌日、鳴海が時間通りに現れた。ドアが開いて外は雨だとようやく気が付いた。掌をかざすとわかる程度の小雨なのだがパソコンが濡れるのを気にしていた。

「この際、本も売ってしまったら」鳴海が提案した。「もう目ぼしいものはないよ。キミと神田古書街を歩き回って買ったレヴィ＝ストロースや堀辰雄の限定本とかルイ＝アルチュセールとかああいうものは神戸の古書店が引き取ってくれた。割に高かったよ」

「働かないとすぐになくなってしまうなあ」そのあとまた急に声が小さくなってぼそぼそと話すから会話が噛みあわなくなって互いに気まずくなった。かといって青白い顔で手伝いに来てくれた鳴海をなじるわけにもいかない。彼らは箱詰めしたパソコンをふたりで抱えて階段を降りようとした。鳴海が足を滑らせて尻餅をつき、慌てて彼はパソコンをひとりで抱える。「何だよ。体力ないなあ」鳴海は虚空を見つめて真剣に怒って何やら叫んでいるようだがちっとも聴こえない。「俺の耳がおかしいのかな。何もそんなに怒ることでもないじゃないか、それに声になっていないんだよ」手を貸して鳴海を引っ張り上げる。「どうしたんだ？」「体調が悪いようだな」今度は少しは聞こえた。ハアハアと肩で息をしている。雨脚がやや強まり彼は焦った。キーを受け取り車に積み込んだ。

鳴海の運転も危なっかしいものだった。傘をさして横断する歩行者を避けようとして大型トレーラーにぶつかりそうになったりオートマチックでないものだからエンジン音だけ元気はいいが信号が変わったのにそのまま居座り追突されそうになったりした。彼はハラハラして気が気ではなかった。「いつもこんな調子なのか？」「そんなことねえよ！」吐き捨てるように言う。気が付くと片手で運転している。「今日は右ひじが上がらないんだ」「まあ無理するなよ」彼が言う。「なんか言った？」彼は頭を抱えて黙り込む。

「ああ、俺な、同棲してるんだぜ」「同姓？　誰と？」「ビダイセイだよ」「なんだ新種の植物か？　ふうん。それがどうした？」「羨ましいかい？」彼は頭を捻る。鳴海は片手をハンドルから離してギャをV速にチェンジする。よせよ、お前は俺をバカにしてるんか？　してないって。

命からがらＪＲ神戸駅まで辿り着いた。三宮と違って寂れている。貨物駅のような人通

りの無さ。その界隈に中古のパソコンショップがあった。ちょっと話つけてくるからここで待っててくれ、彼は言い残して強くなった雨の中を傘も差さずに走って行った。その店も高架下だった。磨き上げた中古のパソコンが並んでいた。店主はぶっきらぼうな中年男だった。型番を言うと最新ではないがまあまあ売れているという返事だった。だから二十万で引き取ろうと。二十万！　彼には有難い数字だった。いいですよ。ほとんど使ってないですけどね。取扱説明書もあるし。「ソフトは？」男は尋ねた。「ソフトはないですよ」男は苦笑した。「ソフトが無ければただのハコだよ。パソコンなんて。そりゃいつまでたっても新品だ。まだよくわからずに買ってしまう人はけっこういるね。確かに」「そのうち通信として使われるようですね。会社で言ってました」「ふむふむ。では見せてもらおうか」彼は駐車場所に戻ろうとした。視界を遮るような激しい雨。「しばらく待ちますか？」男は言う。「急に激しくなりましたね」傘を貸してくれた。彼は傘があるなら鳴海を待たせても悪いと思いパソコンを取りに戻る。降りやまない雨の中で黒い影が車の脇に立っていた。ＪＲの高架を電車が通過してしまうまで彼が声を掛けても鳴海は反応しなかった。

鳴海！

パソコンもろともびしょ濡れだった。いつのまにか箱から出していた、

「何をしてるんだ！」声を掛けても黙っている。「動けないんだ」小声で彼は答えた。考え事をしているようにぼんやりとしていた。彼は背筋が冷たくなった。雨のせいばかりではなく何か尋常でないことが起きていると思った。彼は傘を鳴海に渡して代わりにパソコンを抱えて店内に走り込んだ。鳴海は助手席の座席を横にして眠りについた。

戻ってきても動かなかった。何十分か、そのままだった。

目覚めると気分が悪くてしょうがないと言う。予定していたレストランでの食事は中止した。二万円を返すと鳴海はすぐに帰ろうとした。その時、思い出したように「美大生の彼女を紹介するよ」と言った。少し休んだからか、今度は意味が通じるくらいに明瞭に発音した。「付き合っているのか？」「さっき言っただろうに」とだけ彼は言った。「本当だよ、来週の日曜日、また来るから。いいだろう、金もできたことだし。とにかく何でもいいから早く就職しなよ」思いがけない言葉に彼は呆気にとられていた。鳴海が他人に干渉するのは初めてのことのような気がした。

消費者金融は近いうちに取り立てに来るに違いないので返すことにした。水道とガスと電気は止められては困る。半年くらいは大丈夫なようだが。そして一応電話も。

何日か部屋でうずくまっていた。残っているのは十八万円弱だった。札束を腹の上に置いていた。ずっと。ロビンソンの最期の食糧のようであった。毎日同じ日々が続くものと思われていた或る晩は電話が深夜一時過ぎだというのに鳴りやまなかった。深夜に電話が掛かったことはない。取り立ては禁じられている。それで五分間ずっと鳴らしていたが、鳴りやまないので受話器を取った。

白川だった。息せきこんだ白川が言うには鳴海が集中治療室にいるということだった。家族への連絡が取れない為、手帳から連絡先の見つかった白川と美大生に連絡が行き、たまたま白川の入院先に搬送されたのだという。マンションの花壇に深夜に倒れているのを塾帰りの中学生に発見された。警察も来ていて自殺未遂なのではないかと。「行こう」彼は短く答えてタクシーを呼ぶことにした。

病院に到着した。面会謝絶だったが家族代わりに彼ら三人は集中治療室の脇の部屋にい

た。心肺の様子を伝える装置がある。頸の長い色白の女性を彼は鳴海の姉に似ていると思った。それが例の美大生に違いなかった。「明史さんですね。三人で会うことになっていた……」そのとたん彼女は号泣した。「助からないみたいです！」鳴海の物語が不意に途絶えようとしていた。「おかしかった。何日か前からおかしかった。自殺じゃない。病気が事故を引き起こしたんだ」彼は看護婦とも医者にともつかず喚き散らした。ずしりと重い球のような塊が彼の胸に覆いかぶさりおそらくは白川と美大生も同じ想いに包まれていただろう。最新設備のはずだったが、病院の蛍光灯はランプのような貧しい明りしか発していなかった。（了）